

第38回 日本ケルト学会 研究大会 プログラム



日時 2018年10月20日(土)・21日(日)

会場 富山大学五福キャンパス

人文学部 3階 第6講義室

大会責任者 中島 淑恵
(連絡先) toshie@hmt.u-toyama.ac.jp

大会参加費 一般 1,000円 学生 無料
懇親会費 一般 5,000円 学生 2,000円

第38回 日本ケルト学会 研究大会 プログラム

10月20日(土)

- 12:30 受付開始
- 13:00～13:10 挨拶 代表幹事 梁川 英俊
- 13:10～13:55 個別報告1 「古期アイルランド語の未来語幹 *íba-* ‘will drink’ の印欧祖語からの変遷」
報告者 小林 浩斗 司会 小池 剛史
- 13:55～14:40 個別報告2
「ジャック・カンブリーの『フィニステール県旅行記』について—啓蒙から民俗学へ」
報告者 中村 優天 司会 中島 淑恵
- 14:40～15:00 休憩
- 15:00～15:45 個別報告3
「アイルランドのフォークロアにおける「木」と異界について」
報告者 丸山 香 司会 平島直一郎
- 15:45～17:15 基調講演
「声から文字へ — ブルトン語の口承文学」
講演者 ロナン・カルヴェス 司会 梁川 英俊
- 17:30 懇親会

10月21日(日)

- 9:30 受付開始
- 10:00～10:45 個別報告4
「現代ウェールズ語動詞の活用体系: *gwelaf* は現在形か未来形か?
——Peter Wynn Thomas (1996)の文法記述の検証」
報告者 小池 剛史 司会 森野 聡子
- 10:45～11:30 個別報告5
「『ブリタニア列王史』のアイスランド語翻案『ブロン人のサガ』の2ヴァージョン
——アーサー王をめぐる部分を中心に——」
報告者 林 邦彦 司会 小路 邦子
- 11:30～11:45 休憩
- 11:45～12:30 個別報告6
「ロマンティック・バレエに見るケルティシズム」
報告者 森野 聡子
司会 不破 有理
- 12:30～12:45 総会
- 12:45～13:30 昼食
- 13:30～16:00 フォーラム・オン 「ケルト人ラフカディオ・ハーン？」
報告1 「日本文学史と「ケルト」」
報告者 鈴木 暁世
報告2 「ラフカディオ・ハーンの著作における「ケルト」について」
報告者 中島 淑恵
報告3 「ラフカディオ・ハーンと「ケルト幻想」」
報告者 梁川 英俊
- 16:00 閉会の辞 大会責任者 中島 淑恵

基調講演

声から文字へーブルトン語の口承文学 De l'oral à l'écrit

講演者 ロナン・カルヴェス 氏

ブルトン語文学の起源について考えるとき、必ず名前が挙がる人にIvonet Omnesがいる。この15世紀の筆生は、自分が書き写していた写本の余白に数行のブルトン語の韻文を書きつけた。その詩には、白い頬をした、シャツのすそが魅力的な若い娘が謳われていたが、このテーマはその後数世紀の間に書かれ、今日まで伝えられるブルトン語のテキストとはかなり趣を異にしている。というのも、その種のテキストは一般に宗教文学に属するものだからである。とはいえ、Ivonet Omnesは一個の象徴である。彼が見事に体現しているのは、14世紀から15世紀にかけてブルトン語に起こる一個の革命、話し言葉の領域から書き言葉のそれへの移行だからだ。

15世紀以前にブルトン語で書かれた文学の痕跡は残っていない。もし文学があったとしても、それはもっぱら口承によるものである。その点では、他のインド＝ヨーロッパ語による文学も同類である。その口承による文学は19世紀には民衆文学と呼ばれ、非識字者の農民の口から、太古の文学の片鱗が採集され始める。驚異に満ちた異世界で起こる、あり得ない冒険物語や、昔の戦士たちやその手柄の栄光を称える詩篇からなるその文学は、一直線に原始時代から現代に伝えられたものだった。このような文学は、口頭で繰り返し語られることによって、社会集団の結束を固める役割を果たしたに違いない。が、周期的に回帰するサイクルで構成されたその文学は、循環的時間に属しており、歴史を免れる。始まりも終わりもなく、永遠に現在であるこの口承文学の時間は、聖なるものの時間である。

19世紀に採集され、多くの出版の対象となったのは、このような文学であった。しかし、声から文字になることで、その文学は役割を変えていく。

フォーラム・オン 問題提起

ケルト人ラフカディオ・ハーン？ Lafcadio Hearn is a Celtic Man?

アイルランド人を父に、ギリシャ人を母にもち、ギリシャ、アイルランド、アメリカ、マルチニックなどを経て日本に住み、その民俗文化に深い関心を示したラフカディオ・ハーンは、近代日本の歴史において異貌の存在である。そのハーンの行動や精神を理解するために、しばしば参照されてきたのが「ケルト」である。「ケルト人という西洋人の中では異質で、むしろ日本人に近い感性をもつ民族の血を引くがゆえに、ハーンは日本文化に深い理解を示し得た」という理解は、同時代のアイルランドにおける「ケルト復興」の機運と相俟って、それなりの説得力をもって明治末期から大正期の日本の文化人の間に流通した。のみならず、それは今日のハーンをめぐる多くの言説にも伏流しているように思える。その傾向はこの作家とアイルランドとの強いつながりを主張するポール・マレイの『ファンタスティック・ジャーニー』の登場以来、とくに強まっていると言えよう。

本フォーラム・オンでは、「ケルト人ハーン」という了解の歴史性と、今日ハーンが「ケルト」と比較される際の文脈を検討しながら、ハーンを理解する上で「ケルト」を参照することの妥当性を問うてみたい。

(文責・梁川英俊)

フォーラム・オン報告 1

日本文学史と「ケルト」

The History of Japanese Literature and 'Celt'

報告者 鈴木 暁世

明治以降の日本における国民国家の推進のなかで、西洋文学史をモデルとして、外発的に形成された「日本文学史」は、文学史が国民あるいは民族に共有された伝統や特徴を明らかにするという叙述を描いている。例えば、三上参次、高津鍬三郎『日本文学史』(1890)では、「文学史は、以て其国民の心を、窺ひ得べしと云ふ意義なり」とイポリット・テーヌを受容する形で書き起こされ、芳賀矢一『国文学史十講』(1899)では「文学史の裏面には世界に特殊なる我國民の歴史が認められる」とあるなど、作家の作品は国民性や国民精神の表象とされた。

本間久雄、厨川白村、菊池寛らは、ラフカディオ・ハーンの文学を「ケルト」民族の特質とされた(感情的で熱情的、空想力に富んだ性質)が現れたものと規定する。さらに、ハーンを一つの媒介とすることで、「ケルト」と「日本」との民族的、文学的、文化的類似論が出現してくる。本発表では、言わば「ケルト」を鏡として「日本」の輪郭を定めようとしたことから引き起こされたと考えられる日本近現代文学史における「ケルト」への関心を、資料をもとに検証していきたい。

フォーラム・オン報告 2

ラフカディオ・ハーンの著作における「ケルト」について

On 'Celt' or 'Celtic' in the writings of Lafcadio Hearn

報告者 中島 淑恵

ラフカディオ・ハーンについては、父親がアイルランド系であることから、「ケルト」の出自を思わせる記述がその著作に数多くみられることは一般によく指摘される場所である。また、「母なるギリシア」と対比させて、「父なるケルト」といった具合に、ハーンにおける「ケルト性」はさまざまな評者が指摘しているところでもある。確かに、アメリカ滞在中にケルト的というよりはアイルランド的なファーストネームの「パトリック」を捨て、もっぱらギリシアの生地に由来するミドルネームの「ラフカディオ」を名乗るようになるハーンにとって、アイルランドという出自は両義的な意味を持つものであったことは確かであろう。

しかし本報告では原点に戻って、ハーンがその著作の中で「ケルト(Celt)」または「ケルト的(Celtic)」という言葉を用いる時、それはどのような文脈で、どのような意味で用いられているのか、テキストに即して読み直すことから始め、果たしてケルト＝アイルランドと短絡してよいのか、という問いにも挑んでみたいと考えている。

フォーラム・オン報告 3

ラフカディオ・ハーンと「ケルト幻想」

Lafcadio Haern and 'Celtic illusion'

報告者 梁川 英俊

日本では一般にケルトとはアイルランドのことであり、他のケルト諸地域の認知度はきわめて低い。この偏向の一因は、おそらくラフカディオ・ハーンにある。ハーンが存在は、それほど日本人に「ケルト幻想」を植え付けた。ケルト幻想とはすなわち、「ケルト人＝アイルランド人と日本人の間には共通性がある」という信憑である。この信憑は、あるときはドルイド教と古神道を混同させ、あるときはアイルランドに対して過剰なまでの思い入れを投影させた。

本報告では、まずこの種の「ケルト幻想」にもとづくハーン読解の典型的なパターンを幾つか取り上げて検証し、このような読解がなぜハーン研究において許容されるのか、その理由を問う。そのうえで、改めてハーンのテキストとその個人史を、特にヨーロッパの民俗学およびケルト学の成立という文脈に沿って検討し、ハーンとケルトの新たな関連性を基礎づけてみたい。

個別報告 1

古期アイルランド語の未来語幹 *íba-* ‘will drink’ の印欧祖語からの変遷

The development of Old Irish future stem *íba-* ‘will drink’ from Proto-Indo-European

報告者 小林 浩斗

本報告の目的は、古期アイルランド語の動詞 *ibid* /iβʰəð/ ‘(s)he drinks’ の未来語幹 *íba-* を皮切りに、この動詞の各語幹が印欧祖語からどのような変遷をたどったかを考察することである。古期アイルランド語の未来語幹はインド・イラン語派で desiderative と呼ばれる活用の語幹と同源であり、これらは語根の子音を重複させて形成される。ところが、この動詞では現在語幹 *ib-* もまた語根の子音の重複に由来している。この動詞の印欧祖語における語根は **peh3-* であり、印欧祖語の語頭の **p-* はケルト語派において摩擦音を経た後に消失する (*ib- < *φi-b- < *pi-ph3-*)。これらを鑑みれば、ケルト祖語において **φi-b-* または **i-b-* が語根として再分析されたこと、つまり *íba-* の長母音 *í* が二次的に生じたことがわかる。これは印欧語の観点からみて自明であり、そのためか、この動詞についての議論は不十分なままである。Schumacher (2004:516) はケルト祖語における未来語幹を **φi-φib-se-* と再建するが、**φ* の重複を想定する根拠が全く述べられていない。

本報告で報告者は Schumacher (2004) と異なる変遷を提唱する。具体的には、ケルト語派の他の言語に少数ながら在証される動詞の語形をもとに、desiderative に正確に対応するこの動詞の未来語幹がケルト祖語の初期段階には残っていたと想定する。その後、子音 **φ* の消失を契機に、重複しない語幹 **ā-* (<**φā-* <**peh3-*) と重複する語幹 **ib-* という全く異なる異形態が生じたことで、語幹に改編が施されたという報告者の考えを示す。

個別報告 2

ジャック・カンブリーの『フィニステール県旅行記』について—啓蒙から民俗学へ

Jacques Cambry ‘s Voyage dans le Finistère (1799)– From the Enlightenment to folklore-

報告者 中村 優天

1749年にブルターニュのロリアンに生まれたジャック・カンブリーは、イタリア、イギリス、スイスを旅し、ハイチのサン＝ドマング、インドのスラトヤボンディシエルに滞在したのち、ロリアンの治安判事の補佐や検事を歴任した。カンベルレの地区長であった1794年、県の行政機関の命により、フィニステール県を巡回し、1795年に『ヴァンダリズムから逃れたものカタログ』を提出した。その経験をもとに執筆した『フィニステール県旅行記』(1799年)は、ブルターニュの文化・習俗、言語等を初めて客観的に紹介した書物として現在では古典的な価値を持つ。政治的には共和派で啓蒙主義者であったカンブリーだが、この著作を機にケルトの古代へと関心を深め、1805年には仲間とともにケルトアカデミーを設立しその会長になる。本発表では、主として啓蒙主義者と民俗学者の共存という観点から、この『旅行記』の内容を検討してみたい。

個別報告 3

アイルランドのフォークロアにおける「木」と異界について

A Study of 'Trees' and the Other World in Irish Folklore

報告者 丸山 香

本発表では、アイルランドのフォークロアに登場する樹木類に、他の国や地域にはない独自の「異界的」な要素や意味合いがないかについて分析する。

木のフォークロアは、主として木の「役割」について二つのテーマに大別できる。一つは地域共同体における重要な場所を示す指標としての役割、もう一つは民間の習慣や迷信において不思議な力の根源とみなされる役割である。前者は特に神話や伝説に関連づけられ、後者は民間伝承に頻繁に見受けられるが、両方の分野で重要な要素を担う木はわずかであるとされ、ほとんどの樹木類はどちらか一方の役割に比重が置かれる傾向にある。こうした「木」の役割について、実在する木の種類ごとに特徴や伝承を羅列し説明する研究は既になされているが、具体的な民話のなかで「木」がどのように描写されているか、また、「異界」との関わりを付与されているか否かについては、考察の余地があると考えている。

今回着目する「異界」の範囲としてSean O'Sullivanの民話集に典拠を求め、樹木類が登場する話を抽出し、特定の樹木におけるフォークロア的な意味について分析を試みる。

個別報告 4

現代ウェールズ語動詞の活用体系：gwelafは現在形か未来形か？

Peter Wynn Thomas (1996)の文法記述の検証

The Conjugation of Verbs in Modern Welsh: is *gwelaf* a present form or a future form?

Study of Peter Wynn Thomas's treatment in his *Gramadeg* (1996)

報告者 小池 剛史

現代ウェールズ語の動詞の活用体系は、John Morris-Jones (1913)による印欧語比較文法の枠組みによる伝統的文法記述以来、直説法(現在・未完了・過去・大過去)、仮定法(現在・未完了)、命令法(現在)という枠組みで記述されてきた。この各活用形の名称は、伝統文法に準ずるものであると同時に、近代ウェールズ語の用法を反映している部分も多くあり、現在ウェールズ語での用法と多分に乖離するところがある。特に伝統的に「現在形」とされる活用形、例えば、gwela(f) (< gweld「見る」「会う」の現在形1人称単数)は、現代ウェールズ語では未来、特に意志未来を表す活用形として用いられている。ただし、文体によっては「現在形」の活用形は習慣を含む現在の意味で用いられることもあり、用法が多岐にわたる活用形である。

Peter Wynn Thomasは大著『ウェールズ語文法』(*Gramadeg y Gymreag*, 1996年)の中で、gwnafを「現在形」とはせず、「未来形」として扱い、現用ウェールズ語の実際の用法を合わせた活用体系を描いている。本発表では、ウェールズ語のgwnafのような活用形の用法が「現在」の意味から「未来」の意味へと移行しつつあることを、近代ウェールズ語と現代ウェールズ語の文献の用例の比較対照を通じて裏付けた上で、Thomasの提唱する動詞の活用体系、特に「未来形」の記述を検証し、その記述のこれまでの伝統文法とどのような点で画期的に異なるかを詳述する。

個別報告 5

『ブリタニア列王史』のアイスランド語翻案『ブロン人のサガ』の2ヴァージョン

——アーサー王をめぐる部分を中心に——

An Essay on the Two Versions of the *Breta Sögur*, the Icelandic Adaptation from Geoffrey of Monmouth's *Historia regum Britanniae*: an Attempt of Comparison Focusing on the Arthurian Section

報告者 林 邦彦

ジェフリー・オブ・モンマス(Geoffrey of Monmouth)の『ブリタニア列王史』(*Historia regum Britanniae*)が1200年頃にアイスランド語に翻案されたものと考えられている『ブロン人のサガ』(*Breta Sögur*)は、性格の異なる二つのヴァージョンが伝承されている。一つは、百科事典様の書物を目指して編纂された『ホイクルの書』(*Hauksbók*)と呼ばれる写本に含まれ、文学作品よりもむしろ歴史書の性格を持ち、簡潔な描写を特徴としたものであるが、もう一つは、感情描写や儀式などの細かな描写が多く、ロマンスの性格を持つヴァージョンである。ただ、『ホイクルの書』に含まれる版はeditionが刊行されているものの、ロマンスの性格を持つ方は、editionが刊行されておらず、『ホイクルの書』の版の本文の随所に付された脚注にロマンス版のテキストの該当箇所の記述が部分的に紹介されている形である。そこで本発表では、『ブロン人のサガ』について、アーサー王の生涯を扱った部分を中心に、『ホイクルの書』の版、およびその脚注に記されたロマンス版の内容を、ジェフリー作品、およびその翻案であるヴァース(Wace)の『ブリュ物語』(*Roman de Brut*)の該当箇所と比較し、『ブロン人のサガ』の両ヴァージョンに見られる、先行研究で未指摘の特徴を浮き彫りにしたい。

個別報告 6

ロマンティック・バレエに見るケルティシズム

Celticism in le ballet romantique

報告者 森野 聡子

19世紀初頭、宮廷を飛び出して劇場娯楽となったバレエは、ロマン主義の機運によって異国情緒と幻想美で観客を惹きつけた。中でも、ふんわりした白いチュチュをまとったバレリーナが踊る妖精ものは、ポアント(つま先立ち)というバレエの技法を導入したことで知られる。妖精を扱った作品で現代でも上演される『ラ・シルフィード』(*La Sylphide*, 1832年初演)と『ジゼル』(*Giselle, ou Les Wilis*, 1841年初演)は、前者がシャルル・ノディエ原作で舞台はスコットランド・ハイランズ、後者がハイネの『流刑の神々』所収の散文をもとにテオフィル・ゴーティエらが脚本にしたものである。ロマンティック・バレエについては、従来バレエ史の中でのみ論じられてきた傾向があり、オシアン詩編に発する、当時のケルティシズムの文脈で分析している論者はあまりないことから、これらのバレエ作品や原作における妖精の取り上げられ方や表象に、当時のケルト観の反映を探るのが本研究の目的である。

総会

議題

1. 名誉会員の推薦
2. 日本ケルト学会の学術団体申請について
3. 2017年度決算報告
4. 2018年度予算案
5. その他

報告事項

1. 会計関連
2. その他

会場案内

〒930-8555 富山市五福 3190 番地富山大学 五福キャンパス

人文学部第 6 講義室

※ 会場までのアクセス

市内電車をご利用の場合

JR 富山駅からは約 20 分かかります。JR 富山駅前「富山駅」停留所にて 2 系統（大学前行）に乗車し（約 15 分）、「大学前」停留所下車してください。徒歩約 5 分でキャンパスに到着します。

バスをご利用の場合

JR 富山駅から約 20 分かかります。JR 富山駅南口バスターミナル 3 番のりばにて富山地鉄・路線バス「富山大学前経由」に乗車し、「富山大学前」バス停で下車してください。大学はバス停下車後すぐにあります。

富山大学キャンパスマップ

